第３７号 執筆者@短信

大石仁美

皆さま、ご心配をおかけしましたが、すっかり元気になりました。 病気をしたおかげで、この数か月のんびりさせてもらい、こんなに安らかな気持ちで、気の赴くままに自由に過ごせる日が来るとは思ってもいませんでした。ぜいたくな5か月でした。

診断名は進行性結腸癌 ステージⅢ。内視鏡検査やCTなど映像が驚くほど鮮明で、画面で見ながら医師から説明してもらえるので、よく理解できるのですが、本当にこれが自分の体の中で起きていることなのか、にわかに信じられず、高揚と緊張の中で説明を受けたことを思い出します。

PT検査で遠隔転移はないとわかったものの、癌そのものが大きく、近くの尿管に張り付いていたりすると、やっかいな手術になるし、リンパ節への転移も全部取り切れるとは限らないと言われると、考えることは、「万一の準備をしておかなくては･･･」ということばかりが、頭の中をぐるぐる回っておりました。

しんどかったのは、診断が出てから手術までの待ち時間でした。日々大きくなってくるのが実感できるのです。（そんなに急激に大きくなるはずはないのですが）ありえないことが本当におきているように感じてしまう強迫感。 それに腸管が閉塞気味で、スコープが通らない状況なので、手術まで野菜は食べないようにと言われたことが妄想に拍車を掛けました。

野菜は煮込んでスープだけ飲み、卵粥と、うどんばかりの食事の日々。友人が特製スープや甘酒の差し入れをしてくれたことが有りがたく、心癒されました。

「はやく切り取って捨ててしまいたい！」心の中で叫びながら過ごした数週間。手術日が本当に待ち遠しかったです。

手術は大きすぎて腹空鏡だけでは取れないので、開腹しましたが、なんと縫い目の上を医療用透明ボンドで張り付けて密閉してあるのでガーゼ不要。いつでも傷口をチェック出来、感染の心配もなし。すごいです！

それに、硬膜外麻酔（背中から脊髄の外側に管を入れて固定し、麻酔薬を注入する方法）で、いつでも自分でポンプを押し、薬液を注入出来るのですから、これは大変たすかりました。痛みは我慢すると薬が効かなくなることが分かっていたので、痛みが来る前に 30 分間隔でどんどんこれを使いました。ベッドの上で体を動かせたい時にこの薬がなかったら一人では出来なかったでしょう。本当に医療の進歩に感謝です。

数十年医療現場から離れている私にとって、まさに別世界！見ること聞くことすべてが新鮮で、その意味でとてもおもしろい入院生活でした。でも、少し動けるようになると、退屈で退屈で、仕方がありません。ベッドに寝転んで、テレビを見たり、本を読んだり･･･ナースの方の言動を密かに点数化して遊んでみたり。ああ･･もう退屈で死にそう･･･で、点滴が上手く入らないことをいいことに食事の進行を少し早める許可を得て、術後８日目に退院しました。われながらなんという回復力！！退院後の検査では13センチあった肥大化した癌と周辺組織もきれいに取れていて、抗がん剤を使わず、経過観察することに。

私はなんて強運の持ち主でしょう。まるで夢をみているようです。夢をみながら確信したことは、しんどいこと、不安なこと、どうしていいか分からないこと等があれば、一人で溜めこまないで声に出すこと。そうすると周囲が動いてくれるということです。声に出さなければ分からない。一人で抱え込むことは決して良いことではない。おかげで私は、多くの方に助けてもらい励ましてもらって、ストレスを少なく過ごすことができたのです。回復が速かったのは、そうした力によるものでしょう。良き友人、知人に恵まれました。感謝、感謝です。

６月からフルで職場にもどります。次回から連載も再開したいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

脇野　千恵

最近、13 歳 8 か月になる飼い犬が、終末を迎えています。スタンダードダックスフント。

今日本では珍しいようです。散歩をさせていると、「大きいミニチュアダックスですね」と声を掛けられます。犬には違いないのですが、こちらもプライド？というものがあり、「スタンダードです」と声高に答えてしまいます。もともとは、穴熊捕りのために改良されたドイツの犬種。胴が長いのはそのためでしょう。洋犬では、我が家の犬は長生きをしている方とか。しかし、歯、乳がん、子宮がん、3回の大きな手術を乗りこえてきました。よく頑張ってきたなと思います。まだ食欲はありますが、耳は聞こえなくなっているようです。今、咳き込むことが多く、肺に何か？血尿も出るなど…。先の見えない介護となりますが、もう処置を施さず、静かに過ごさせてやりたいと思っています。

こころ日記「ぽちぽち」partⅡ
p264～

岡田隆介

退職を機に子ども以外の領域も経験しようと考え、週一で認知症専門病院のお世話になったのは 5 年前のことだ。そういえば格好いいが、実際は未だに残っている衝動性や見通しのなさで突っ走った

結論にすぎない。

行き始めてすぐ、現場の看護スタッフが求めているのは内科疾患やケガに対処できる医師だとわかった。自分はといえば、ループのような話に付き合ったり作業療法に加わったりしかできない“役立たず”だ。「必要とされている」という拠り所を持たずに働くのは地獄だった。先に身体が反応し、やがてこころもきしみだした。

それでも 3 年が過ぎた頃には、さほど年齢差がないという強みが生きたのか、ノンキな医師とのおしゃべりに付き合ってくれるお年寄りが増えてきた。そして、これはこれでありかなと思えるようになった。

そうこうするうちに、認知症病院に子どものことを相談に来る家族が増えてノンキな医師でもなくなってきた。こうなると、俄然元気がでてくる。結局、「子どもと家族」しか診れないという事実を受け入れるのに 5 年近くかかったことになる。そしていま、自分はこの病院で広がった世界を楽しんでいる。

思えば、その昔、安全な樹上からあえて地面に降り立ちサバンナに先乗りした猿人だって、衝動性・見通しのなさ・落ち着きのなさ・不器用さ（木登りがうまくない）があればこそだったろう。結論は急がない、人生は奥が深いのだ！

エア絵本 －ビジュアル系子ども・家族の理解と支援（4）－
p041～

一宮　茂子

「倫理的配慮の難しさ」

私自身の経験の一部をある著者が書籍にして出版した。その本を読んでこう思った。「事実と異なる部分がある」と。しかしその著者は私が大変お世話になった人。とてもクレームはつけられないと思ったし、納得いかないけど黙認した。

一方、これまでの私は原著や博論、単著では草稿段階で対象者にフィードバックして同意をえてきた。その過程で「語り」を引用する難しさを実感した。たとえば対象者の舅に「身の回りの細かな世話は協力が得られなかった」というジェンダーに関する語りを草稿に採用したのだが、その後の舅は亡くなった。対象者の言い分は、死者にネガティヴな印象を被せたくないとのこと。かといって事実に反することは書けないため削除することにした。

このように同意が得られなかった語りは、たとえ学術的に価値があるものだとしても論文として社会に公開できない。どうすればいいのだろうか？　私自身の文章表現力のなさを思い知らされている。

生体肝移植ドナーをめぐる物語（4）
P251～

松岡　園子

6 月から母が英語塾を再開することになりました。昨年から今春にかけて、障がい者グループホームに入居できればとの声を拾い、代表を務める NPO 法人での整備計画を立てていました。しかし、整備補助金がおりなかったため少し立ち止まって考えてみることにしました。市からは再度、申請を勧めてもらいましたが、ちょっと保留です。

今後、どうしていきたいかということを熟考する良い機会になっていると思います。

私の方も少し視点を変えて、また別の方向からサポートの形を実践してみます。

統合失調症を患う母とともに生きる子ども（4）
P239～

中條　與子

前 36 号への原稿を書きながら、「もう一度生きなおした」ような気持ちになり、37 号に向けて書き続けていると、私にとって生きるとはどういう事なのか、ということが、ほんの少し垣間見えた気もしましたが、うまくまとまらず、完成にいたりませんでした。淡くいろづき、ぼんやりと浮かび上がってきた「自分らしく生きる」ということを思うと、納得できる原稿を提出させていただきたいと思い、今回はお休みすることにしました。

先日、咲きはじめの紫陽花に気づきました。これから雨に濡れながら、時折のぞく光にキラキラ輝きながら、蕾から花びらに、そして淡い淡い色を重ねて、少しずつ色が深まる花びらになると思います。

書くということを通して、もう一度生きなおしながら、同時に今を生きることも、なかなか難しいけれど、淡い色を重ねて、少しずつ色が深まる紫陽花のように、文章が仕上がっていけばいいなと思います。寄稿できました折には、どうぞよろしくお願いいたします。

杉江　太朗

早いもので、対人援助学マガジンに掲載させて頂くようになり、2年目を迎えています。ちょうど1年前の短信で人事異動により、転勤をしたと書いたかと思うのですが、なんと1年でもといた職場に戻ることになりました。1年ぶりの『返り咲き』もしくは『出戻り』です。そのことにより、管理していた店舗（カフェドゥスギエ）も移動となり、新たにオープンする運びとなりました。やはりこの職場ではコーヒー系の売れ行きが良いようです。なぜでしょうか。1年しか離れていませんが、多くの変化や違いに気付かされる毎日です。今回のテーマは『不連続の中の連続性』です。対人援助学マガジンに原稿を掲載させて頂くという連続性を意識しながら、より良い変化を生み続けていきます。

「余地」－相談業務を楽しむ方法－（6）
P235～

迫　共

5 月末、愛媛県で企業主導型保育所の運営を巡る助成金不正取得事件が起こり、逮捕者が出ています。

私はこの問題について早くから追っており、研究者として愛媛新聞社の記者からインタビューを受けました。

保育所の日常を知る者としては考えられない巨額の助成金が、子ども達のために使われることなく右から左に流れ、その総額の把握すら難しいようです。怒りを感じつつ、制度をよくするための方策を考え、お話させて頂きました。

その一方で保育者養成校の学生達と日々を過ごし、実習指導のために幼稚園を巡回しています。せわしなくもおだやかな日常と、金めあての事件のあまりのギャップに呆然としてしまいます。

と社会福祉を漫画で学ぶ（）
P232～

朴　希沙（Kisa　Paku）

先日、立命館大学の某先生とお話している中で、「真綿に首を締められるような感覚」というものについて話し合った。

その先生によると、最近の学生、いや最近だけでなく昔から、何が苦しいとはっきり言語化することは難しいものの、「真綿で首を締められていくような」苦しみを感じている人々が、結構いるのだということであった。

学生たちの中でも、周りから見て特段何か大きな困難があるわけではないのにも関わらず、非常に傷ついていたり、周囲のささやかな反応に怯えたりしている人たちがいるという。

私は以前から、その「ぼんやりとした苦しみ」のようなものに対して、自分があまり理解出来ないことを自覚していた。そのような感覚は、しばしば映画や、歌や、小説の中で表現されるのだが、私自身の身に引きつけて、腹の中から「分かるな、自分にもこのような感覚がある」と思えない。

本当は、理解したいと思うのだけれど…。先生と話し合っていくうちに、そのような感覚は、ある程度の社会的保証を持っていると（主観的には）感じている人々が、その「普通」から外れ、社会から白い目で見られたら、恐ろしいことになると怯えてしまって、自分の中に閉じこもってしまったり、なんとか世間に外れないように必死でしがみつこうとするところから生まれてくる感覚なのではないかと教えてもらった。

なるほど、そのような感覚があるのかと、新鮮な思いがした。私にももちろん、「世間」を気にしたり、「普通」になりたいという思いはある。けれども、それを1番に気にしたりはしない。

某先生もそうとのことだった。先生の場合は、世間よりも自分を信じているのだった。世間よりも自分を信じ、自分が正しいと思ったことを行い、自分の足で立って荒野を歩いていくことが好きだし、今までそうやって生きてきたことに、誇りも自信も持っているのだと思う。

私の場合は、世間よりも、具体的な友人たちを信じている。例えば私には、腹を割って自分のつらいことや世間と違うところについて話し合ったり、深く理解しあえる友人が、何人もいる。そうできるように、大切に思う人たちと厚みのある関係を築いてきたことに、私なりの確信や自信を持っている。だからこそ、多分世間がそこまで気にならないのだと思う。

「人のことなんか気にするな」と言うのは簡単だ。でももしかしたら、「世間」や「権威」や「普通」よりも自分が確信を持って信じられる関係や経験を、日々紡いでいくことが、もっと大切ことなのかもしれない。

マイクロアグレッションと私たち（7）
P228～

浅田　英輔

20年ほど前、実家では犬を飼っていました。きょうだいはずっとほしいと言っていましたが、私はほしいとは思いませんでした。うるさいやつでしたが、一緒にいるとかわいいし、私は犬派となりました。

今の家にはネコがいます。子どもたちが欲しいといい、妻は賛成しました。私は「基本は反対だが、みんながいいならダメとは言わない」という意見でした。旅行できないし、家は汚くなるし、オマエたちちゃんと世話するんでしょうね？と思っていました。

今はふたりいます。もう！かわいくて仕方がない！！！壁紙もソファもカーテンもボロボロ？しょうがないよね。絶対ネコ派！よそのネコもかわいいけど、ウチの子たちが一番かわいいです。スマホにはネコフォルダあります。見たい方はいくらでも見せますので遠慮なく言ってください。

臨床のきれはし（4）
P128～

三浦　恵子

地域の在り方について様々に考えることが重なっていた時，地域ケア連携に関するシンポジウムに参加する機会に恵まれました。グループごとの話し合いもあり，自分たちが当然のように口にする「地域」について，改めて考えさせられました。

社会には膨大な情報が溢れていますが，1人の人間が獲得しじっくりと考えることのできる情報量には限りがあります。地域や社会で起きている出来事について，自分と切り離なすことなく，心を寄せていくことによって初めて得られる情報もあれば，そこからつながっていく「縁」もあります。対人援助職としても，現代社会に生きる1人の人間としても，そうした「縁」を大切にしていきたいと思っています。

更生保護護官署職員
（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

現代社会を『関係性』という観点から考える（8）
P220～

寺田　弘志

10連休に台北へ、包丁マッサージを受けにいってきました。

台北駅の地下街にあるお店を訪ねました。店の前に行くと、中から「包丁マッサージ」いかがですか？」と女性が声をかけてきました。

日本人とすぐわかるその女性の能力に感心していると、女性は2本の包丁を互いにこすり合わせて「痛くないよ。大丈夫」と勧めてきました。包丁マッサージを受けて感じたことは、本文で。

接骨院に心理学を入れてみた（7）
P213～

袴田　洋子

前回は、お休みしてしまいました。すみません（念のため申し上げておきますが、連載の内容は、フィクションですので）。

地域のみなさんと共に、若年性認知症の会を立ち上げました（こちらは、本当です）。「ライゼの会」と言います。

https://jyakunen-reise.jimdofree.com/
毎月第４日曜日に開催。今日は、第２回目。暑い中、よく来てくださいました。認知症予防も悪くないけれど、「認知症になっても大丈夫だよ」と言い合える地域にしていきたいねと話しています。来月からは、朝霞駅前のスターバックスさんで、「Deme Cafe」も開催。　　。
https://jyakunen-reise.jimdofree.com/deme-cafe-%E6%A1%88%E5%86%85/
地域の社会資源として、細く長く続けていけるように、と皆さんと話しています。

援助職のリカバリー
Ｐ１２０～

飯田奈美子

すみれ組（年中）に進級をした娘（4 歳）。進級したことで出来ることも増えてきました。

朝の準備も 1 人でできるようになり、お片付けやお手伝いも積極的にするようになってきました。まだまだ、甘えん坊がでてきて出来ない時もありますが、少しずつ成長していっていることがわかり、嬉しいやら少し寂しいやらです。

特に、最近娘の成長が感じられるのは、「うんてい」です。保育園の園庭にあるのですが、年長のお友達がスイスイとうんていをしている様子をみて、自分でもしたいと思い、毎日毎日練習を行っていました。運動音痴な母の子ですので、出来ないものだと思い込んでいたら、ある日、一段できるようになったのです。その後はすぐに端から端までわたることが出来るようになりました。うんていが出来るようになったことも嬉しいのですが、それよりも、自分のやりたいことを一生懸命努力し、それを達成する姿に感動しました。ノーベル平和賞を受賞したマララさんの父親が「娘の翼を折らないようにしてきた」と話をしていたこと、肝に銘じていきたいなと感じました。

対人援助通訳の実践から（7）
P224～

山口洋典

先日、立命館大学サービスラーニングセンターの「減災×学びプロジェクト」の引率で、地震から 3 年が経った熊本に行ってきました。発災当初に農業復興ボランティアでお世話になった農家さんを訪れ、唐芋（さつまいも）の苗付けのお手伝いをしつつ、外部支援者との関わりのあり方などについて意見交換をして参りました。

その前の週は新潟県中越地震で大きな被害が出た小千谷市塩谷集落に同じメンバーで訪れ、田植えを通じて交流しつつ、発災から 15 年が経過しようとしている今、改めて災害が集落にもたらした影響について学びを深めました。間もなく大阪北部地震から 1 年、平成が「戦争のない時代」として終わった中で、令和の時代にはどのような災害がもたらされるのか、改めて過去を丁寧に見つめていきたい、と決意する今日この頃です。
（写真、5 月 26 日、熊本県西原村での活動の様子）

PBLの風と土（8）
P207～

関谷　啓子

今日、ホスピスでお一人の方をお見送りした。高齢の男性だったが、お見送りの時のチャプレンの言葉が心に残った。「最後の時を私たちと一緒に過ごす時間を与えてくれた神に感謝します」と話された。

ひと月半ほどの入院生活だったが、毎日奥さんが見舞いに来られ、大半の時間をお部屋やロビーで一緒に過ごされた。心に残るシーンがある。

奥さんが少しの間離れて買い物に行かれた事があった。すると彼は「お母さんお母さん」と探され、私たち周りのものが「すぐに戻られますよ」となだめても落ち着かれない様子。戻られた奥さんは苦笑しながら「もうどこへも行きませんよ」と言われやっと落ち着かれた。

しばらくはお二人でロビーから見える大文字の山々の新緑を楽しんでおられたが、フッと見ると奥さんはご主人の髪を少しずつカットされておられた。白髪のうなじを少しずつ少しずつ手に取りながらハサミを動かしながら、何事かを耳元で話しておられる。その姿は神々しく思われ、私は思わず見入ってしまった。

長い年月を共に過ごして来られて二人でたどり着いた時間なのだろうなあ～と思うと胸が熱くなった。

こんな風に一緒に時を静かに迎えるために生きてきたのかなあ・・・と。

週に一度、ボランティアに行く私はコーヒーを立てて運ぶことぐらいしかできないけれど、それでも近くにいさせてもらえてよかったと思う。

お見送りの賛美歌を歌っていると、向かいの森の中からまだ練習しているみたいなウグイスの鳴き声が聞こえてきたことも印象深いことだった。

私の出会った人々
P198～

黒田　長宏

まだ寒い頃から始まった連ドラの『なつぞら』も、主人公が酪農を続けるか、それともアニメーターの道を目指すのかという選択に悩み・・・というところに来たが、どうしても気持ちがアニメーターに行っているのを正直に育ての優しい家族に伝えられたところである。そしてだんだん夏空らしい時期にもなってくる。

ただし日本の夏は暑すぎる。私自身も、農村出身者なのに農業よりも男女問題のようなところに関心があり、出身地的には裏切ったような変なコンプレックスはあるのだが、やらない。

しかし、本文をご覧いただきたい。私のライフワークは結婚したい人は結婚できる社会にすることだ。それだけできれば、村上春樹氏がノーベル賞をもらうよりもずっと価値があるはずだ。（5月17日）

https://konnankyuujotai.jimdofree.com/

あぁ結婚　（10）
P204～

鵜野祐介

今年もまた、自宅の書斎の窓ガラス越しにヤモリがへばりつく時候となりました。無防備な白い腹部が艶めかしい、羽虫を捕らえるハンターですが、どことなく魚のししゃもにも似ています。塩焼きにしたら美味しいでしょうか。

うたとかたりの対人援助学 （11）
P200～

山下桂永子

平成最後の日、朝 6 時に起きて寝室を出ると家中が水浸しになっていました。なんだこりゃ？しばらく呆然としました。未明からの強い雨で雨漏りが起きていたようでした。奇跡的に寝室だけが無傷だったので気付かないうちに家じゅうに水たまりができていました。

慌ててネットで探した雨漏り修理の 24 時間対応の電話にかけると、「業者が 8 時半にならないとつながりませんのでお待ちください」とオペレーターのお姉さんに言われました。

・・・。どこが 24 時間対応やねん。

茫然とした気持ちのまま、友人と美術館に行く予定をキャンセルし、雨漏りの場所にバケツやらバスタオルやらを置いて床を拭きながら少しずつ悲しくなりました。

9 時前に連絡が来て、「雨がやんで屋根が乾かないと修理に行けません、早くても明日の午後です」と業者のおにいさんに言われました。

・・・・・・。どこが 24 時間対応やねん。24 時間対応って、連絡を受ける、予定を決めるだけですぐ修理にきてくれるわけではないのか。少し怒りがこみあげてきつつ、家中の雨漏りとぞうきん 1 つで戦いながらだいぶ悲しくなりました。

24 時間対応ってなんぞや。1 カ月近くたって今振り返ってみると、24 時間対応は、修理に来てくれるわけでなくとも、なんか話を聞いてくれる、それでもってちょっと見通しをたててくれていたわけで、これってちゃんとサービスだなあと思うわけです。

そんなこんなで、今回も前回に引き続き、見通しを立てることで自分なりに不安や緊張と向き合っていた A さんの話の続きです。読んでいただければ幸いです。

町家合宿 in 京都 （9）
P183～

尾上明代

この 3 ケ月の間に、介護に関して想定外のことがいくつか起きて、それらに費やす時間が大幅に増えました。それで、仕事のためのエネルギーや自身の休養を確保することに集中しなければならない状況でした。残念ですが、今回の執筆はお休みさせていただきます。

ケアマネやヘルパー、医師、訪問看護師、PT・・その他たくさんの方々がともにいて支えて下さっています。この強力なチームのおかげで、私は仕事をすることができています。毎日感謝で一杯です！

小池英梨子

春は猫の出産ラッシュである。10～2 月くらいまではバンバン声がかかっていた大人の保護猫に、全然声がかからなくなる。毎日猫の里親募集サイトには小さな子猫が 30 匹ほど投稿される。そんな季節でも、じっと家族を待っている猫たちがいる。子猫は体調も不安定だし、長時間の留守も無理。どんな性格になるかも分からない。一方、成猫は性格も分かっているし、お留守番もできるし、手もかからない。お勧めです。成猫を家族に迎えてくださる方、ぜひご連絡ください。 。

e.kosame12@gmail.com

そうだ、猫に聞いてみよう（13）
P188～

松村奈奈子

今年のGWは瀬戸内の島々へ。穏やかな海を眺めながら、海沿いをレンタサイクルで巡るほんわかした時間、シアワセ！でした。

最終日にふと訪ねた真鍋島。そこは島民200人にも満たない小さな島。港の小さな土産屋さんの前には、たくさんの猫と祭りのハッピを着たお兄さん2人。茶髪だったりピアスだったりと今風の兄さん達はニコニコと話しかけてきます。聞けば、高校から島を離れ、GWの祭りの期間だけ島に帰っていると。祭りの話なんかをしていると、ふと「なんで島が好きなん？」と聞かれました。「風景ももちろんだけど、よくも悪くも島の人間関係の難しさの中で生きていく人が気になって」と私。即座に「あっ、俺らもそれを変えようとしたんやけど、あかんかった」と笑います。2人は島の生活の難しさも語ってくれます。でも最後に、ピアスをしたオシャレな方のお兄さんが続けます「でもね、もう少し年とったら、俺はいつか島に帰ってくるつもりや」と。帰りの船に向かう私たちに、手を振って見送ってくれるお兄さん2人。島を思う若者に「じーん」ときた私でした。

精神科医の思うこと（12）
P168～

奥野景子

前回のマガジンは、「マガジンを書くこと」について考えるために休載させていただいた。色々と考えた結果、今回のマガジンで対人援助学マガジンでのおくのほそみちを終わりにすることにした。

ただ、私のおくのほそみちは、これからも続けていくし、続いていく。どこかで発表するかは未定だが、これからも何かしらのかたちにしていこうとは思う。

今までありがとうございました。また、どこかで、見つけてもらえるように。それでは、また！！今後に乞うご期待！！！！

おくのほそみち
p267～

柳　たかを

本誌に連載させていただいている漫画

「東成区の昭和・やぶにらみ日記」は、作者が2005年に某芸大マンガ科の教職に就く以前、自分の個人的なウェブ連載のために描き継いだ4コママンガ・自分史です。

19歳でプロの仲間入りをしてから、「さあ作品を作るぞ！」と思うとき「何の為にその作品を書く(描く)のか」「見る人に何を伝えたいのか」を自分に尋ねてきました。

折々の時事ニュースや世相をテーマにカートゥーン作品を制作しようとする時、自分の考えや自分の個性のフィルターを通し加工したものでないと描く意味がないと、自分にプレッシャーをかけました。

しかし自分は何を一番大切に思っているのか、心の中心に何を抱いているのか･･･言葉にすると･･･

ある時「それを言葉にして誤解なく伝わるのなら作品に描く必要があるのか、言葉に出来ないから作品を作る」のだと、先輩に言われたことがあります。

30代後半から、某ハウスメーカーの企業広告にたずさわり、住まいのもつ機能・役割りについて考えを深める経験をしました。

自分の「気持ち」と広告とを一致させて作品化するという、苦労も含めて幸せな時間でした。

広告に流れるメッセージは「思いやりが伝わる家」、そこで最高の思いやりについて考えました。理想的な家のイメージが持てず迷いましたが、だんだん和風の高級イメージには、豪華さ・派手さよりも「家に帰った」ような寛ぎ感こそふさわしいように思えたのです。

振り返れば、幼い頃の思い出は酷く叱られたり、大泣きした兄弟ゲンカも含め、確かに自分の育った世界と時間があった証拠、宝物の記憶です。

家族はもちろんのこと、兄に背の高さを測ってもらった時についた柱のキズにも「懐かしい記憶」と当時の気持ちが熱く蘇って来ます。

それらをヒントに制作、やがて広告主からの嬉しい評価、「これだ！」手応えを感じたのでした。

はや70歳、そろそろたまる記憶よりも失う記憶の心配をする頃となりました。本連載をきっかけに忘れかけている記憶を蘇らせてもらっています。ただただ「ありがとう！」という思いです。

東成区の昭和　思い出ほろほろメモ P175～

齋藤　清二

たいへん申し訳ありませんが、今回は休載させていただきます。

近況ですが、3 月ころから膝の調子が悪く、例年はせっせとでかけていた梅、桃、桜の鑑賞も控え、家でデスクワークばかりしていたら、本当に歩けなくなり、危機感を覚えて整形外科を受診しました。簡単な診察と X 線撮影の後、「運動不足です」と言われ、がっくりきました。痛みと折り合いをつけながら、歩く量を増やしたら、ずいぶん回復しました。なるほど、「足萎え」とはよくいったものです。黒田官兵衛とか和気清麻呂とかもこういうことだったのかなあ、と思いつつ護王神社に参拝してきました。

話は変わりますが、この 2 年ほど取り組んできた翻訳書の宣伝をさせていただきます。『ナラティブ・メディスンの原理と実践』。米国コロンビア大学で 20 年にわたり行われてきた、医療者への物語能力教育法についての最新・詳細なテキストです。7 月 18 日発売予定ですが、アマゾン等で予約受付が開始されました。大著なので定価 6480 円とちょっとお高いですが、北大路書房さんのご好意で、直接出版社にご注文の方に限り、発刊記念期間限定（7 月 31 日まで）特別販売価格　5200 円（税・送料込み）でご購入いただけます。FAX または E-mail にて直接お申込みください。詳細を知りたい方は sights8823@gmail.com あてにメールをいただけるとうれしいです。

小林茂

年度明けてから、社会保険をかけている先という意味において、主たる業務が大学教員ということになった。

大学教員の社会的なステータスはわかないが、とりあえずびっくりしたことは学生へのケアが手厚く、退学者が出ないように必死であるということだった。しかも、1 年生のクラス担任もすることになり、「これ？必要なの･･･。」という感想を持った。しかし、2か月が過ぎ、クラス担任制度が必要なことがわかった。フォローとケアすることが大学教員に求められる。この歳になって、大学や大学生に対するイメージが再び変わった。

通り一遍の生き方しかできないが、いろいろな仕事にかかわると、見聞が広まる。“多種多動”の生き方の良さかもしれない。

＜温泉紹介＞

☆竹山高原ホテル　竹山高原温泉

由来：約600トンもの北海道の銘石を積み上げて造られた露天風呂は開放感一杯でお湯はぬるめで長湯が気持ちいい。

夜空を見ながら露天風呂はお勧め。お湯はコーヒー色の単純泉で、アルカリ性が高いためぬるりとした肌触り。遠くに樽前山や恵庭岳を望める。

10 時～16 時は大広間が無料開放される。4月下旬～11 月上旬はパターゴルフ場も併設されている。

温泉質：アルカリ性単純泉

泉温 14.5℃(冷泉)　湧出量：130L/分

浴用適応症：神経痛・筋肉痛・冷え性・五十肩・疲労回復・健康増進

〒061-1153
北海道北広島市富ヶ岡 896-5
TEL:011-373-2827
営業:10 時～22 時(受付～22 時)露天・サウナは～21 時
休業:第 1・3 月曜休、定休日が祝日の場合は翌日休

対人支援　点描(18)
P165～

中島弘美

担当している専門学校の学生さんは、今年度は特に留学生が多い。中国人、ベトナム人がクラスの三分の二を占めて、教室はいつもにぎやかだ。

授業をして気がついたことは、私の話す日本語が必ずしも正しくないということ、そして「こんな感じでやってください」など、説明が不足していることだ、前からわかっているつもりだが、改めて痛感している。

「先生、ゆっくり話さなくても、もっと早くてもわかりますよ」と優しい学生さんの声。その心遣いがうれしい。この春からも、楽しく、授業をしています！

カウンセリングのお作法(18)
P33～

藤信子

今年の春は、寒さが戻ったりしたので、桜を昨年のように長く見ることが出来た。3 月の終わりに、中学のクラス会で、東京で花見をするという企画があったので出かけた。

私たちの中学は長崎にあるのだけれど、関東に結構たくさんの人が住んでいるので皆時々集まるようだ。私は東京に出るのは仕事の用ばかりという生活なので、そろそろ仕事から退いた後のことも考え、仕事以外の出かける機会を作った方がよいだろうと思いついたこともある。

東京の友人たちの企画のおかげで、千鳥ヶ淵の桜を堪能することが出来た。人混みが苦手な私一人なら、とてもじゃないが見ることが出来なかったと思う。ほぼ50年ぶりに話す人もいて、お互いが覚えていることはそれぞれ違い、人の記憶の面白さを感じもした時間だった。

難病の訪問カウンセリング
p39～

千葉晃央

高 1 の息子がフェンシング部に入った。始めてひと月程度で、いきなり試合。タイミングがあったので観にいった。体育館にこだまするのはサーベルがぶつかり合う音と、選手の叫び声。

練習で、基本動作を繰り返していた選手は、1，2，3はアン、ドゥ、トロワーといっていたが、その先の4のことも言っていたようだけど、わからない。試合時の集中した局面と、試合前後のスマートな所作は、独特な雰囲気あり。私は、フェンシングの道具も触れたことがないし、ルールも知らないし、試合もきちんと観たことがない…。そこに彼は進み、親にその世界を見せてくれている。試合で、1 ポイント取った姿も見た。もう、それだけで報われる。

新しい世界に飛び込んだ息子よ、その選択がすでに称賛に値する！ガンバレ！

知的障害者の労働現場
P17～

中村正

日本財団の支援を得て、社会的養育についてのプロジェクトを準備している。この 8 月からスタートする。サイトを作成したのでご覧いただければと思う。この社会的養育プロジェクトは非血縁家族での育ちを進めようとするもので、里親による養育が主となるが、里親をささえる仕組みも含めて子どもの育ちが社会性をもつことをきちんと地域で保障できることを意図している。18 歳を超えても育ての親との関係は続くし、それまでも生みの親との関係をどうするかについても子どもの意見を尊重して決定できるような体制をとり、さらに何らかのトラウマ的な体験をしていることが想定されるので子どものケアを社会が用意するということになる。オーストラリアの仕組みを調査するために 5 月下旬にブリスベンに行った。施設か里親かという二分法ではなく、子どもの現状にあわせて多様な支援の仕組みが用意されていた。感銘を受けたのは、少年司法、ユースサービス、いじめ、被虐待、家族不和、親族支援、先住民の子どもの里親、DV のある場合、子どもに障害のある場合等のあらゆる事態が想定され、サービス提供者(非営利団体)が多数活躍し、官民連携していることだった。これらに子どもの権利の観点から司法が関与して統合し、数多くの命令が発出される仕組みになっている。単に輸入すればいいのではないが、私が関心を持ってここ 25 年ほど取り組んできたことが一続きのものなっている様子は圧巻であった。8 月からはじまる社会的養育プロジェクトに活かしていきたい。このプロジェクトのサイト。　　。
https://fosteringsocialwork.com

臨床社会学の方法(24)
P21～

団遊

仕事の関係でとある大きな会社の組合が主催する運動会に参加した。

参加したといっても、別に走ったり飛んだりするわけではないのだけれど、それなりの役割があった。会場には 1,600 人以上の社員さんとその家族の方もたくさんいらしていて、大盛り上がりだった。

目的は午前中にめどがつき、でも帰るわけにはいかないので、午後はなんとなく競技を見ていた。どうやら部署ごとの対抗戦で、かなりの本気である。そして競技終盤、騎馬戦、リレーといった定番の種目が続くと、誰一人知っている人はいないにも関わらず、なんだかこちらも盛り上がってきた。

ああいった種目はなぜあれほどまでに興奮するのか？　思うに、騎馬戦やリレーはドラマを頭の中で勝手に創作できるのが手に汗を握るポイントではないかと思う。リレーの途中、トップを逆転間際だった緑色チームのおじさんが、カーブでスッテン転んでしまった。

基本的にみんな運動不足だから、転ばず走れるだけですごいと思うのだが、緑のおじさんは、立ち上がりバトンを渡した後、茫然自失といった様子だった。

ここでぼくの頭は勝手に物語を描き

始める。

きっとあの緑のおじさんは、若き部下たちにこの後「すまん、俺のせいで」とかなんとか言うのだろう。しかしそこで若手のホープと呼ばれる緑1号が「何を言ってるんですか、いつも助けられているのは、ぼくたちの方じゃないですか」とかなんとか言うのだろう。すると同僚の緑2号が「おっ1号、いつも客先でのプレゼンは下手くそなのに、こういうときだけ上手いこと言うな」なんて茶化して、その様子を見た緑のおじさんは、「チームって、やっぱりいいよな」なんて思い返し、日頃の自分の後輩への振り舞い方を見つめなおすのだろう、なんて。

まず間違いなくそんなやりとりはないのだろうけれど、ぼくの頭の中で勝手に物語が描かれ続けて行くのは止められない。

そしてそのような小さな物語が、競技中いくつも同時進行で走るものだから、全チームがゴールテープを切った頃にはこちらもヘトヘトになる。まあ、全員知らない人なんですけれどもね。

騎馬戦でも同じような物語がいくつも描かれて、大変に盛り上がりました。ああいう競技は、勝ち負けを超えた物語の種を提供してくれる。だからきっと、鉄板の座を獲得したのでしょうね。

人を育てる会社の社長が、
今考えていること
P30～

村本邦子

今年は、天草、島原、長崎と回り、GWには五島列島、外海、平戸を巡った。

帰ってから、小岸昭(2002)『隠れユダヤ教徒と隠れキリシタン』(人文書院)を読むと、より広い文脈からまったく違った世界が見えてきて、小さな疑問が少しずつ解き明かされていくようだった。

たとえば、4人の少年遣欧使節のうち唯一棄教した千々石ミゲルには、外国人宣教師たちの「精神的征服」の議論から「加害の視点」への気づきが生まれていたのではないかという推測や、幕府治下で改宗・棄教したポルトガル人宣教師フェレイラ、後の沢野忠庵をカトリックの普遍思想によって貶めるのではなく、日本近代の夜明けに貢献した重要人物として見ようとする視点など。「潜伏」と「転び」の内実は、本人のみぞ知る。

著者は、権力と暴力に繋がる「場所」の否定、デリダの言う「非・場」に生きる人々に国や時代を超える精神的系譜を見ている。信じるものが何であれ、自由と平和の実現は決して生易しいものではないのだとつくづく思う。

周辺からの記憶　―東日本大震災
家族応援プロジェクトー(23)
P142～

國友万裕

『ドント・ウォーリー』という映画を見ました。事故で下半身麻痺になってしまった、ジョン・キャラハンを描く実話です。

この映画を観ながら、「赦し」という問題について考えました。この映画の主人公は、不幸な事故で麻痺になったこと、里親に愛してもらえなかったことを恨みながら、どこかで自分を責めています。「こんなことになったのは俺に原因があったのではないか」という自責の念があるわけです。そんな彼が、キリスト教の影響を受けて、自分を傷つけた人々を赦し始めた時に、自分自身も赦し始めることになります。

僕は、「男は痛い！」で毎号グルグル思いを巡らしていますが、なんかトラウマは癒えず、この悪循環から抜け出すにはどうしたらいいのか考えていました。そんな時に、この映画を観たので、僕も「自分を赦す」ことをしてみようと思い始めました。

そのためには彼みたいに自分にトラウマを負わせた人をノートに書き出して、一人一人赦していくこと、それが必要なのかもしれません。とは言っても、そこまでの境地には達するのには大量の時間が必要です。

今55歳。人生まだまだ時間があるので、これからの人生で赦していく努力をしたいと思います。全ての人を赦すことができるようになった時に、僕自身も赦され。心が楽になるのでしょう。DV 被害者のあさみまなさんの『いつか愛せる』は素敵な本でしたが、僕も「いつか赦せる」と信じて、残された人生を生きていきたい。

それが神様から僕に課せられた人生の宿題です。

男は痛い！(31)
P112～

古川秀明

記事には高齢者のことを書きましたが、講演会に来られている高齢者の方(祖父母)と自分の年齢はそんなに変わらないことに最近気づきました。

講演会＆ライブな日々
P134～

西川友理

京都西山短期大学で保育士養成をしています。それから、支援者支援の活動をいくつか、ぼちぼちやってます。

新年度に職場内でお引っ越しとちょっとした配置換えがあり、3 月末～4 月末は机の移動や、事務的な書類の配置転換、仕事の引継ぎ、引き継がれと、多くの整理整頓に明け暮れました。

動線が変わると、様々な空気の流れがかわり、コミュニケーションの流れが変わります。場に合わせているだけのつもりで

も、その場のコミュニケーションをかたちづくる要素のひとつになっているんだなぁという事を実感します。
だから、きっと私もこの「置かれた場所」で、何か出来る事があるはずだ、と思いながら、ほんの少しだけ新しい環境で、今までと違う動き方を試してみたりしています。

福祉系対人援助職養成の現場から P73～

坂口伊都

今年度から NPO 法人チャイルド・リソース・センター（CRC）が主たる職場になりました。CRC は、児童相談所の外部委託として、親子の関係を作りなおしていくプログラムを提供しています。その他、社会的養護に関わる方にアタッチメントを中心とした親子支援の研修等をしています。CRC には、10 年以上前から所属をしていますが、週1からだんだんと関わる時間が増えていきました。久しぶりに主たる仕事を持つ感覚を思い出し、とても新鮮な気分になりました。

以前は大学の教員をしていましたが、里親になるためにフリーになり、CRC の他に非常勤講師や SSW 等の仕事をしていました。主たる仕事ができても、相変わらずいろいろと手を出していますが、集中してその仕事を考えられるってやりやすいですね。今までは、今日は何をするのだったかなと思い出すところからでした。ただ弱小 NPO 法人なので、維持するためにいろいろと画策をしていて、仕事量もグングンと増えていき、ずっと仕事に追いかけられている感じもしています。闇雲に働けばいいというわけでもないと思うので、私は代表やマネージャーに質問を投げかけながら何を共有し、どのような形を作っていけるのか、私なりの視点で見つけられたらいいなと思っています。
宜しければ、http://childrc.kids.coocan.jp/ も覗いてみて下さい!!

養育里親～もうひとつの家族～ P137～

河岸由里子（臨床心理士）

最近とても嬉しい・楽しいことが二つあった。

（左上の気球と同じものに乗りました。）

一つは初めて気球に乗ったこと。これは先日の 10 連休中にあったアメリカでの学会の間にできたことだ。今回はニューメキシコ州アルバカーキの近くの荒野の真ん中にあるようなリゾートで開催された。インディアンの土地でもあり、幌馬車やカウボーイが良く似合う土地。私の発表は一日目に終わったので、そのあとは気楽に人の発表を聞いたり、空き時間に買い物などに行けた。その一つとしての気球。

アルバカーキの町の上をゆっくり、ふわふわと飛びながら、時にはリオグランデ川の水面すれすれまで下りて行ったり、高く高く昇ったり、空港や街並み、大邸宅や一般的な住居などを眺める。

10 人乗りで大きく、膨らませるのにもかなり時間が掛かった。
何も怖いことはなかったが、着地の時が一番大変だったのかもしれない。降りる位置に向かって地上にいる男性が走り、綱をつかんで気球を抑える。籠が着地した瞬間ちょっと倒れそうになる。それを乗客たちでバランスを取って抑える。天気も良く、中々楽しかった。

そしてもう一つが、15 歳の時から 8 年間引きこもっていた青年が、ついに毎日専門学校に通えるようになったこと。10 連休の後に崩れることも無く、自分の目標に向かって頑張っている。病院からもらっている薬も減らしている。凄い！！お友達と夜遅くまで遊んだり、買い物に行ったり、今まで経験したことの無いことを、どんどん経験し、吸収している。若いっていいなあ！！青年が頑張る姿に私も刺激され、まだまだ頑張ろうと思う。

この仕事をしていて一番うれしいことは、目の前の人が元気になって行くこと。成長していくこと。私ももうひと踏ん張り！

北海道　かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

境界あれこれ（12） P79～
先人の知恵から （24）P193～

岡崎正明

友人のススメでみた NHK のドキュメンタリー。「レンタルなんもしない人」への密着取材。30 代半ばの男性が『なんもしない人（ぼく）を貸し出します。常時受付中です。国分寺駅からの交通費と、飲食代等の諸経費だけ（かかれば）ご負担いただきます。飲み食いと、ごくかんたんなうけこたえ以外、なんもできかねます』とツイッターで募集。すでにフォロワーは 15 万人を超え、毎日のように様々な依頼が舞い込むという。

その内容は一緒にライブに行って欲しいとか、犬の散歩に同伴して欲しい。作った料理を食べて欲しいなど、実に様々。なんもしない人は、本当に何もしない（笑）チケット代も払わないし、犬のリードも持たない。調理も片付けも手伝わないし、気の利いたトークで場を盛り上げることもない（それどころか帰りにお土産までもらってた）。ただその時一緒にいて、観たり、歩いたり、食べたり、二言三言感想を述べたりする程度。だけど確実に需要はあり、感謝され、リピーターもいるという。

一緒に見ていた妻は、彼が妻子持ちということに驚いていたが、私は「ほー」くらいだった。もはや結婚し子育てする世代の価値観も、ひとつのひな型で語れなくなりつつある時代だ。

彼曰く、孤独で寂しい人からの依頼が

多いかと思っていたら、たくさん友人がいる人でも周囲に気疲れするなどの理由で頼む人も多いとのこと。そして人それぞれ様々な悩みや想いがあり、本当に世の中が多様なのだと感じたと話していた。

個人的にはなんだかとても安心し、嬉しくなった。そして余計だが、鬱などメンタル問題を抱えた人のリハビリ的な活動にもいいんじゃないかなあ？とか、ボランティア活動が苦手な若者でも、こんなことならどうかなあ？とか考えてしまった。

「ただそこにいるだけ」。その意味を感じ、体験してみるのって、「効率」とか「損得」とか「勝ち負け」ばかりの世の中に疲れる私たちにとって、悪くないんじゃないだろうか。

出会いというやつは、例えそれがごくささやかなものでも、時に人を大きく変化させる力を持っていたりもするものである。

役場の対人援助論（27）
P123～

大谷多加志

3 月の末に、春休みに入った息子を連れて東北を訪れました。昨年の 5 月に、職場とマガジン編集の同僚である千葉さんと一緒に東日本大震災の被災地を訪れた時から、次は息子を連れてこようと考えていました。

昨年と同じく、仙台市内から石巻市までを訪れた後、さらに北上して気仙沼市、陸前高田市、宮古市まで、三陸海岸をひた走る 2 泊 3 日の旅程でした。2 度目の訪問した場所や、新たに訪れた場所を見て、本当に被災のあり方や、その後の復興が、場所によって、人によって、大きく違うのだということを改めて実感しました。

そして、それぞれの場で、生活を立て直し、地域をつなぎ直し、被災を語り継ぎ、日々できることをひたすらに積み重ねておられる方々の姿を見ました。

改元があったって、目の前にあるものは何も変わりません。お祭り騒ぎに紛らわされず、確かだと思えるものに力を注いでいきたいと思います。

新版K式発達検査をめぐって
P130～

馬渡徳子

おもてなしの心遣い

GW に、昨年秋口より「別荘」(特養ホーム)で生活している義母との約束の一泊温泉家族旅行に行ってきた。

年末年始に外泊した折に、「実は、へそくりがあることを思い出した。誰か見つけてくれたら、小遣いあげるよ。預金を下して、温泉に連れて行ってほしい。」と、突然提案をされたのだ。

昨年一月の豪雪の折に、脳出血で倒れてから約一年が経過している。おそらく脳の小さな血管がつながって、記憶も快復してきているのだろう。皆で、義母の記憶を頼りに、必死で探したが、なかなか見つからなかった。

血眼で探す者、最初からありえないわという疑心暗義ぶりが見え見えで探すふりをしている者、義母は面白そうに眺めていた。

ふと、私が結婚後初の母の日にプレゼントさせて頂いた鞄が目について、35年間も大切にして頂けていたことに、うるうると感動しながら鞄を開けた。なんと、へそくりを見つけた!!!

私が小遣いをゲット！早速、連れ合いと長男が、バリアフリーの個室風呂のある温泉で、緊急時にカルテのある総合病院に20分以内に搬送できるところを探した。するとそこは、放課後児童デイサービスで指導員をしている長男の知り合いの旅館だった。3 モーターの電動ベット、シャワーキャリー、浴槽への移動ボード、どちらの麻痺でも対応可能な身体障害者トイレ(オストメイトも完備)、特別治療食を下見で確認し、当日を迎えた。

義母の希望で、県外より叔母二人を招待し、姉妹がそろったことで、「こんな重い障害者になって、何をするにも人の手を借りなくてはならなくて、いちいち頭を下げなくてはならなくて、情けなくて。悪気はないのはわかるけれど、『ちょっと待ってね』と言われて、待ってる度に、『なんで、私を助けてくれたの。早くお父さんのところに行きたい。』と思った。けれど、やっぱり、生きてて良かったわ。ありがとう。妹と息子のお祝いもできたし。次の目標は、秋の温泉と、新幹線でオリンピック。」

偶然、叔母の一人が喜寿で、息子が還暦であることに気付き、義母は張り切ってお祝いの言葉を述べ、仲居さんにいろいろと指示をされていた。

この仲居さんとのやりとりを拝見していて、「義母の指示を聴くしぐさや、『かしこまりました。大奥様のおっしゃるとおりに。今日、この場があるのは、大奥様のご尽力と伺っております。』との応答に、なんという、さりげない、お心遣いだろうと感服した。義母の、凛とたたずむ姿を観て、病前のの義母を思い、私たち夫婦も、とても感動した。

さて、義母は、連れ合いと長男と私の三人の介助で、温泉に浸かることが実現し、本当に満足そうだった。長男は、「今どきおらんよ。こんな優しい子」と感動して涙している叔母二人から、お小遣いをもらって、「わあ！福祉の仕事してて良かった。31歳になって、『平成最後のお年玉』もらった」と喜んでいた。

私たちこそが、義母からプレゼントされた温泉旅行の、おもてなし。仲居さんよりの、おもてなし。よし！また行くぞ！！

「ケアプラン」の価値Ⅳ
P172～

団士郎

私家版ファミリーヒストリーを継続中だ。次男が調査して報告してくれる「団一族」のジェノグラム展開は、いまや日本近代史と不可分なところにある。

父方ルーツをたどると、明治維新を迎えた小浜藩のその後が見えてきた。その團家の養女の婿養子として、仕事ぶりがまじめだったからだろう、迎えられた家柄もない農家の末子の祖父。三重の山奥か

ら、尋常小学校途中で丁稚奉公に出てきて大津の運送屋で、疎水運送の船頭をしていた。

その船が観光船として二年前に復活した。それに、先日一家１１人で乗船してきた。私にとっては感慨深いモノがあった。

約2．5キロの運河トンネルを抜けると山科、そして又トンネルを抜けて京都蹴上へ

母方をたどると、母の父、私の祖父は日本陸軍の大正、昭和の歴史と、運命が錯綜している。この祖父の兵籍簿の詳細さには驚いたが、まだ探索の過程だ。

そして私の父が終戦の前年になってから召集され、中国大陸で過ごした日々も兵籍簿で明らかになった。

日本の戸籍や兵籍簿の記録には正直、驚きがある。最近の国会議員の答弁のように、記録がすぐ無くなるなんて事はない。あらためて記録が残されていることの大切さを思う。

「続・家族理解入門」（7）
P50～

竹中尚文

今回の料理は、インド風シシカバブ

【材料】

マトン(500g、ミンチ)、ししとう(6 本程度、みじん切り)、トマト（2 個、皮をむいてみじん切り、ニンニク(30g、すり下ろし)、ショウガ(30g、すり下ろし)

【調味料】(量は小さじ)

ターメリック(小さじ 2.5)、クミン粉（小さじ 2）レッドペッパー（小さじ 2）、パプリカ(小さじ 3)、ナツメグ（小さじ 2）、カルダモン(適当)、塩(小さじ 0.5～0.7)、コショウ(適当)

【作り方】上記を全部混ぜて、手でよくこねる。ミートボールより少し大きめにまとめて、棒状あるいはミニハンバーグ状にする。フライパンかオーブンで熱する。

今回のバックミュージックは“りりィ”の「オレンジ村から春へ」

1970 年代半ばの曲。コマーシャルソングとして流れた。りりィの巧みな歌唱力がのんびりとした雰囲気を作り出していた。近年、彼女が亡くなった時に、彼女の父親は朝鮮戦争で亡くなった米兵だと知った。人ごとではない。今でこそハーフなんていうが、当時はそんな扱いではなかった。戦争がなければ、戦死がなければ、彼女の母親は「戦争花嫁」として渡米できたかもしれない。彼女も、別の人生があったかも知れない。そっちの方がいいというのではないが、もう少しラクに成長できたかも知れない。この歌の少しユーモラスな空気の向こう側には、過酷な雰囲気の中で一人立つ少女の姿がある。

盆踊り漫遊（5）
P107～

鶴谷　主一

５月８日に大津市で保育園児が信号待ちしている列に車が突っ込んだ痛ましい事故がありました。この事故をきっかけに考えて欲しいことがあります。

反論が噴出するのを承知の上で敢えて問題提起しますが、「園庭の無い保育施設が認可されている現状をなんとかしようよ！」です。

待機児童がいまだに約4万7.000人もいる状況で、とくに都会にお住まいの皆さんには「ナニ寝言を言ってるんだ！」と怒りの声が上がるかもしれません。

なにせ都心部では園庭の無い保育施設は3割になる（朝日新聞5/22）そうです。

改善は至難の業でしょう。

そもそも論でいくと、国が設置基準を緩くして、園庭なしでも公園を利用すれば良しとしたところから間違いが始まったのではないですか。

公園は安全が確保されないだけでなく子どもの発達を考えた環境でもありません。園庭が無ければお散歩は必須になり、園外に出る確率は上がります。事故に遭う確率も当然上がる訳です。

幼稚園・保育園で園外で起きた事故の内、約37%が道路、公園・遊園地がそれを上回る約39%という調査もあります。（朝日新聞6/1デジタル版）

保育の質も量も足りていないと感じている方が6割以上という統計もありますが、国は設置基準を緩和して、一部の子どもたちの発達する権利を奪っている！犠牲になっているのは誰だ！と叫ばなければならない状況なのです。付け焼き刃の保育行政が日本の将来を弱体化しそうで心配です。

原町幼稚園 http://www.haramachi-ki.jp
メール　office@haramachi-ki.jp
インスタ　haramachi.k
ツイッター　haramachikinder

幼稚園の現場から
P64～

水野スウ

この５月、とっても久しぶりに石川での団さん勉強会に参加しました。毎回、その日のお土産にしたい団語（団さんの言葉）を持ち帰るのが楽しみなのだけど、今回のそれは「一つのことを長く続けることも一つの才能。長く続けているとわかることがふえてくる」。

そうかぁ、はやらない週一オープンハウスの「紅茶の時間」が 36 年目になるってことも、もしかしたらそうかも。才能かどうかはさだかじゃないけど、わかることがふえてくるというのは本当にそうだ。てか、逆に言うと、以前はわからないことだらけでしていた、ってことでもあるのだけど。

５月３日、憲法記念日の朝日新聞「ひと」欄に、紅茶の時間という場を続けながら憲法を語っているひと、として紹介してい

ただきました。その見出しにも「憲法が語るのは、あなたのこと、と伝え続ける」と。

その中で、2冊のけんぽう BOOK が平和・協同ジャーナリスト基金の「荒井なみ子賞」を受けたことも記されていたけど、その受賞にしても、ささやかな場と語りの継続に光を当てていただいた、ということだったんだと思う。憲法の出前も、ここ数年間は、語り始めた 15 年前は全く見えていなかった視点で語っています。数年前と今を比べたら、またわかることがふえたので、そのたび中身を更新しつつ、私なりのけんぽうかふぇを続けています。

今回のマガジン原稿は、北海道十勝生まれの一人の若者と、彼が中学を卒業して以来、どこに越そうと持ち続けた母校の生徒憲章と、その彼がダンスを通して紡いできたこと＆これからしようとしていること、がテーマです。彼と生徒憲章との再会物語を綴りながら、紅茶を続けてきてほんとによかった、としみじみ思ったことでした。

きもちは言葉をさがしている（34）
P97～

荒木晃子

体調不良が続いたうえに、上下顎の治療のため入院が必要と診断され、気分が沈みがちな 3 月最後の週末、気分転換にと、奈良県広陵町立図書館へ出かけた。

この場所で毎年開催される「団士郎漫画展」が楽しみなのだ。今年も、大きな漫画パネルを眺めながら、ゆるりと歩みを進めていると、中学生くらいの女の子を連れた、少し年配の母親が女児と腕を組み一緒に漫画展をみていた。女児は結構大きな声で、なんやかんやと 1 人で話し続けている。母親はその声を聴きながら、時折つかんだ腕に力を込め、「この漫画はね・・・」と漫画パネルをみながらそのストーリーを娘に話して聞かせる。すると、母親の声に耳を傾け（ていたかどうかは定かでないが）、女児は一瞬静まり、じっと漫画パネルを見つめている。暫くすると、再びなんやかんやと大きな声で話し始めた女児の腕を抱え、隣のパネルへ 2 人で移動する。この動作を繰り返す親子に出会った。2 人が実の親子かどうかは分からない。静かな図書館に響く女児の声は、決してその場に相応しいといえなかった。でも、その女児が静まりかえり、母が語る漫画パネルのストーリーに耳を傾ける一瞬と、それを静かに見守る図書館内の人々に、ほのぼのとした温かみを感じ、なんだかうれしく思うわたしがいた。疲れていても、辛いこと、悲しいことがあっても、ある日遭遇するこんな出来事に、元気づけられる日々を送っている。

生殖医療と家族援助
P83～

中村　周平

先日、二つ上の兄が結婚相手を紹介したいというので会ってきました。30年以上、兄弟として過ごしてきましたが、正直いって兄は決して器用な人間ではないと思います。ただ、その分、色々なところで努力してきたことも少なからず知っています。そして、その姿勢が彼の良さだと感じています。ようやく、結婚相手という立場で兄の良さに気づいてくれる方が現れたんだなと、弟として嬉しく思いました。

ノーサイド
p105～

見野　大介

SNSの影響か、最近外国人の方が工房見学に来られることが多いです。それ自体は非常に嬉しいんですが、英会話ができないのが悩みの種です。初歩的な内容だったらスマートホンの翻訳機能でなんとかなるのですが、専門的な内容になると一気にグダグダ。
せっかく海を越えて訪れてくれたのに、曖昧な会話しかできないのが毎回心苦しいです。

明日もアメリカから陶芸家が来ることになってるんですが、果たしてどうなることやら（笑）

ハチドリの器
P4～

サトウタツヤ

編集会議の日程が思っていたより遅かったので、駆け込みで原稿を送ることができました。（本人の希望であり本当に届いたかどうかは不明）。

2019 年 3 月に行った TEA ツアーについても書きたかったのですが、福島での活動を振り返ってみました。

対人援助学＆心理学の縦横無尽
P86～

浦田　雅夫

もう、今年の半分が来ました。何と早いことか。温暖化の影響か、四季がなくなってきているのか、ものすごく暑い日々です。みなさん、休み休みいきましょう。

社会的養護の新展開
P62～